

繪本
豐臣勲功記

五編

十





繪本豊臣勲功記五編卷之拾

目録

右川小早川文高きつらにをやがらとあつたぶんたをいさ議軍事ぎぎ

屬元長もとなが弑報ころせうほう

秀右ひでゆき使安國寺あにくにや惠瓊めぐみ調和てんわ

屬傳八でんぱち被捕ひらぼ



豊臣記五編卷之拾

清水長左衛門潔遂自殺

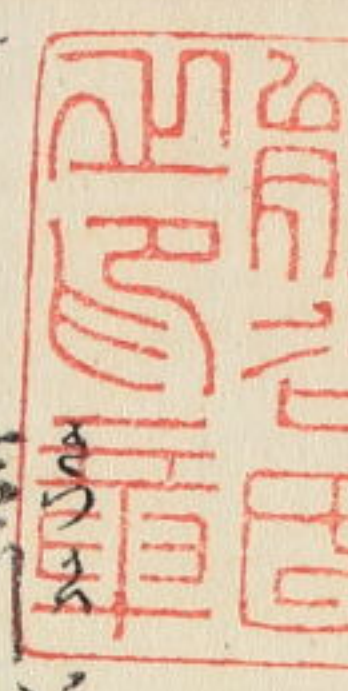
屬 西軍和賂

秀吉大慮真令毛利家服

屬 單駈歸軍



繪本豊臣勲功記五編卷之拾



江戸 八功舎 徳水刪補

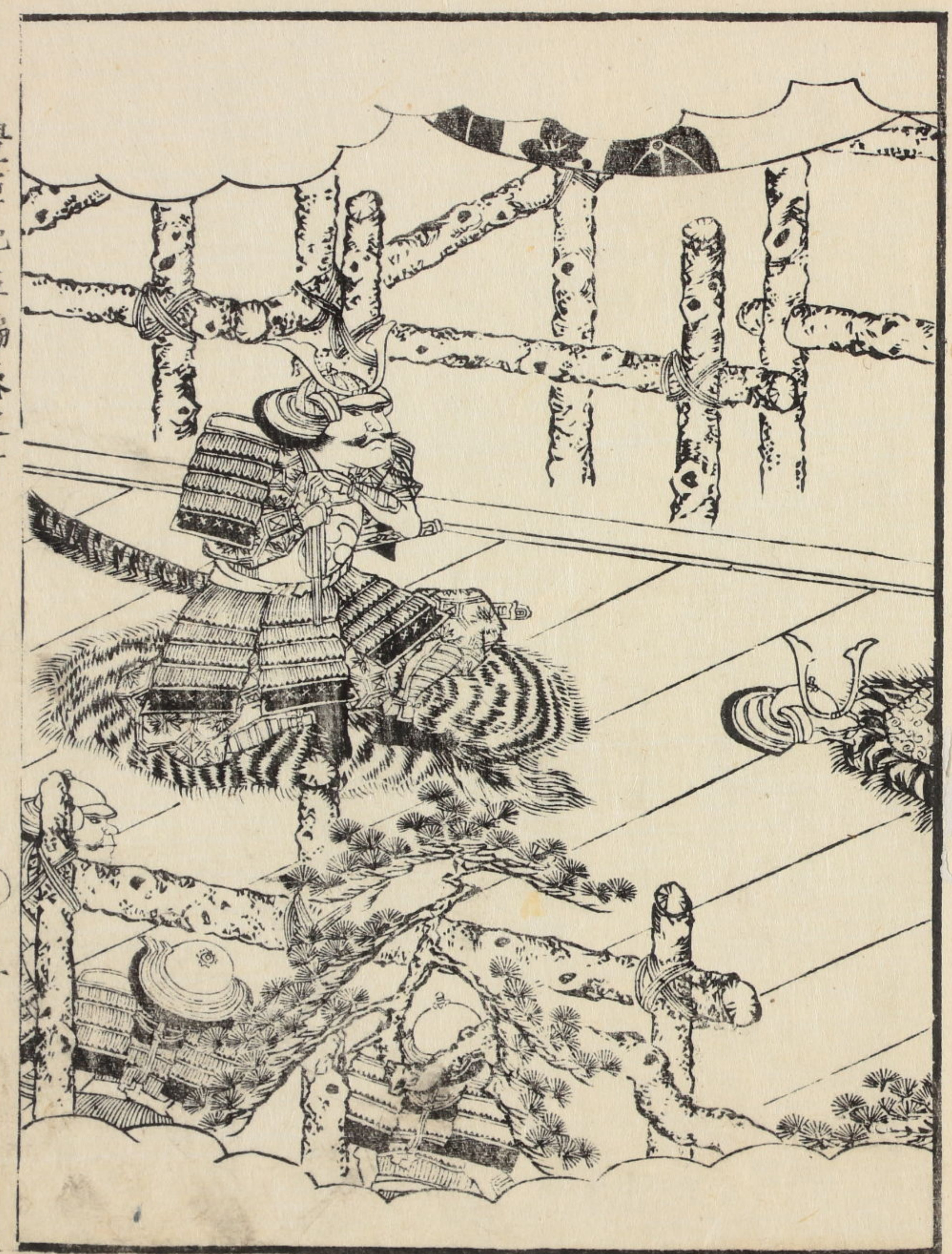
吉川小早川交商議軍事属 元長試叛

一尺の布ハ尚健々なほ一斗の粟ハ尚なほ巻くべしと云ふ兄弟おまはおまは豊臣氏を
表ハおまは豊臣の興るの叔姪家いこ三あるか小賢あるかおまは我なるかおまは吉川小
早川が主と主として心こころ試し一ふし國家を以ておまは泰山の像おまは以て稱なづするとも
猶餘なほあり然バ遠眺中園おまは羽柴筑前守秀吉毛利三家と對陣し
て過つる五月の始頭よりおまは体中おまは松の城を圍おまは漏おまはと然と攻着おまはるおまは開おまは
遠高松の城おまはとの六おまは高くもおまはあおまはね平山おまはが上おまはふ築設おまはけし城おまはにて四面
に池塘おまはを湛おまはたりしおまは秀吉源おまはくを地の理おまはを鑑おまは遠那邊おまはに名流おまは將おまはる長
良川吸毒川大垣川の流を鑑おまは歸此郷中へおまは搦おまは投おまはたを五月の下おまは辭おまはに

至てハ水涼涼く水淋溢き山城渡一丘を趁大波小浪さうちりけく後小
一の大湖水を成し。いま二三人水堵を。高松の城ハ忽地ハ水底に穿れぬ
而して城中の男女老ると初ハと怯て。その後ハ悲嘆を傳へ合せて死
と且夕に侍のまかり秀吉既ハ城中の難危ある態成沈視し。ハハハハハ
艘に櫓を掻揚。城を眼下に視却さ。大炮小炮の筒口を數百連發し。後し
く。放菟菟。改着る。と火急なり。然ども城兵猛勇なれを。怖るる気
免少些もかく。吾我門を固く守り。更ハ疼まず。防戦に然りと。い。と。も
淹滞水ハ。時と刻くに水淋溢て。已所半旬と鍾る。そのゆゑ。我も水七城
兵ハ食骨を水裏の埃と。と。と。と。各潜水。歎息を。お。に。因て。援軍の
大將。若川元春。小早川隆景。備兵。指揮に。い。い。い。と。虚を。視。出
堀を。裁て。陷さ。と。種。と。更。せ。と。き。れ。ども。羽柴の。勢。ハ。大。軍。に。一。瞬

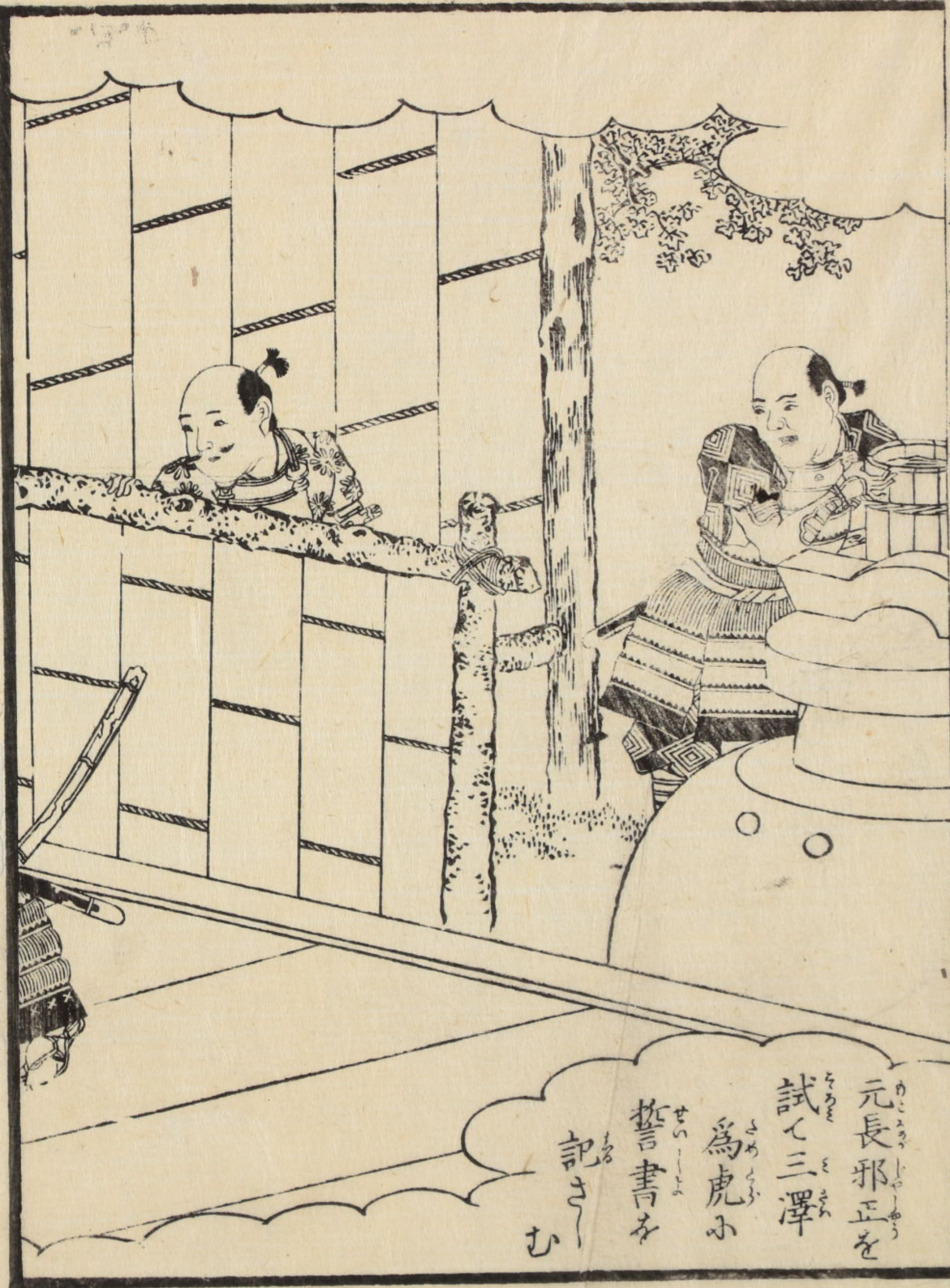
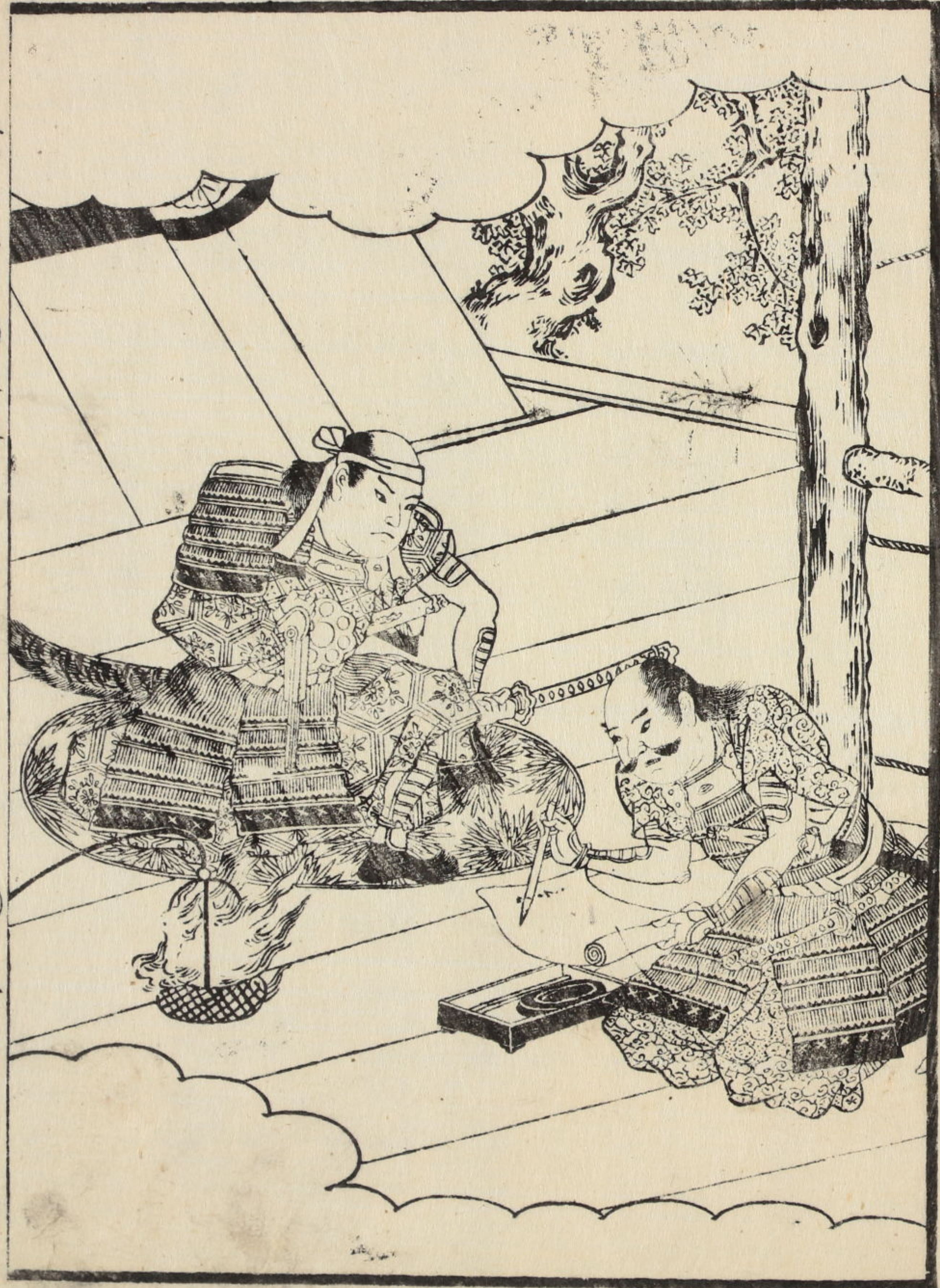
する隙も虚をか。軍令最も嚴密に。一隊伍の面背堅固なれ。斬臨
ま。て。方。便。も。あ。く。南。へ。屋。を。焼。小。過。り。响。も。若。川。元。春。の。嫡。子。治。部。少
補元長。腰甲鳴して。若。屋。宣。と。新。浪。小。高。城。の。区。に。日。と。款。と。敵。者。對
彌。と。在。た。人。ふ。援。軍。な。した。ゆ。ゆ。ゆ。近。來。時。ハ。織。田。信。長。大。軍。を
率。て。中。向。を。止。し。風。聞。の。門。を。ら。り。な。れ。と。款。の。威。勢。ハ。愈。々。と。倍
長。遠。地。に。來。着。せ。六。十。餘。万。騎。の。款。を。その。城。と。れ。に。易。り。て。自。方。ハ。兵
士。ハ。日。々。に。夜。に。恐。怖。を。懐。た。し。て。何。ぞ。其。の。み。れ。る。松。尾。城。を。ら。り。て。遂。ハ
ハ。毛利。家。總。領。軍。に。登。る。と。此。を。其。の。門。と。保。持。に。信。長。出。張。せ。る。う。ち。忽
一。ハ。我。は。ま。り。ま。り。と。り。隆。景。ハ。軍。勢。を。多。く。か。う。と。ま。り。中。に
彼。は。秀。吉。の。旗。本。斬。と。投。入。乃。子。ハ。亦。雲。伯。石。の。勢。を。合。せ。秀。吉
の。陣。城。頑。強。し。攻。逼。と。は。法。路。より。秀。吉。が。勢。に。搦。て。投。隆。景。ハ。河。津。將。と。捷

猿菟山ふかい
吉川小早川
軍高議
とろす



一時に改代を勝利必定なりぬ。且亦徳宗の浮田勢の素来反叛に弱
 兵を遣はし強き方を試照て一遂に伐く出べからば家之浮沈身之安危唯遠
 一舉に決着す。十死のうち一生の命我せさせしか。と席を打てて重さ
 れらる。然るも小早川隆景の才智最厚深けき。只係計成先ず。合我
 せしむるは後子まらるの名将をかく率るに合致さる。目と腕を以て思惟
 成類。おたりたる由元春焦燥て席を退き。いふ隆景。いま元長言
 せしとあらハ一理ありとこそ。聆ゆれば息流元長も魁を敗せ乃夫後陣に
 破る攻るを胸紫此勢を破崩さん。と堂に物を推るが如し。蓋し日貞を
 送らんより一我小事決まるのや。別の方術のいす。と宣ひて是を隆景
 にせらる。懸頭て同日。多ひ。獲ふ元春河父子の命詞理に當りて覺え
 此敵の後陣に到らぬ。存亡の命我をあたふ。偉然も直しくい。と。

漸く同をせらる。さる。小を。然バ明日ハ列戦して。敵自軍此目と驚は。と高
 一決たり。と。元利の長が三澤為虎といふ者。所志を。若此
 通ト及軍するの深計あり。と。密に告る輩ある。と。自軍此諸兵士通互
 心忽地疑ひ生ト。誰染の敵に。自を。進兵を導て自方の陣を敗むるを
 どのふ。或ハ秀吉小頼を。而將の首を。破に降らん。と。さる。を。お
 里かど。さ。に。是。合羽。密計あり。出。つ。を。なれ
 各。合。明日の軍を愉快。進まん。と。さる。氣色。かけ。此。小軍。か
 一。亦。延。あり。つ。風。説。論。に。言。七。位。長。近。日。二十。餘。万
 の。大。軍。ふ。推。進。す。よ。か。る。自。軍。ハ。元。利。之。衆。の。不。援。軍。の。勢。も。か。り
 各。を。送。の。衆。も。多。く。決。て。も。對。陣。の。力。及。を。元。春。隆。景。を。遠
 う。ぬ。ら。陣。を。拂。て。帰。國。する。と。私。語。合。て。を。や。ら。ん。諸。軍。の。是。も



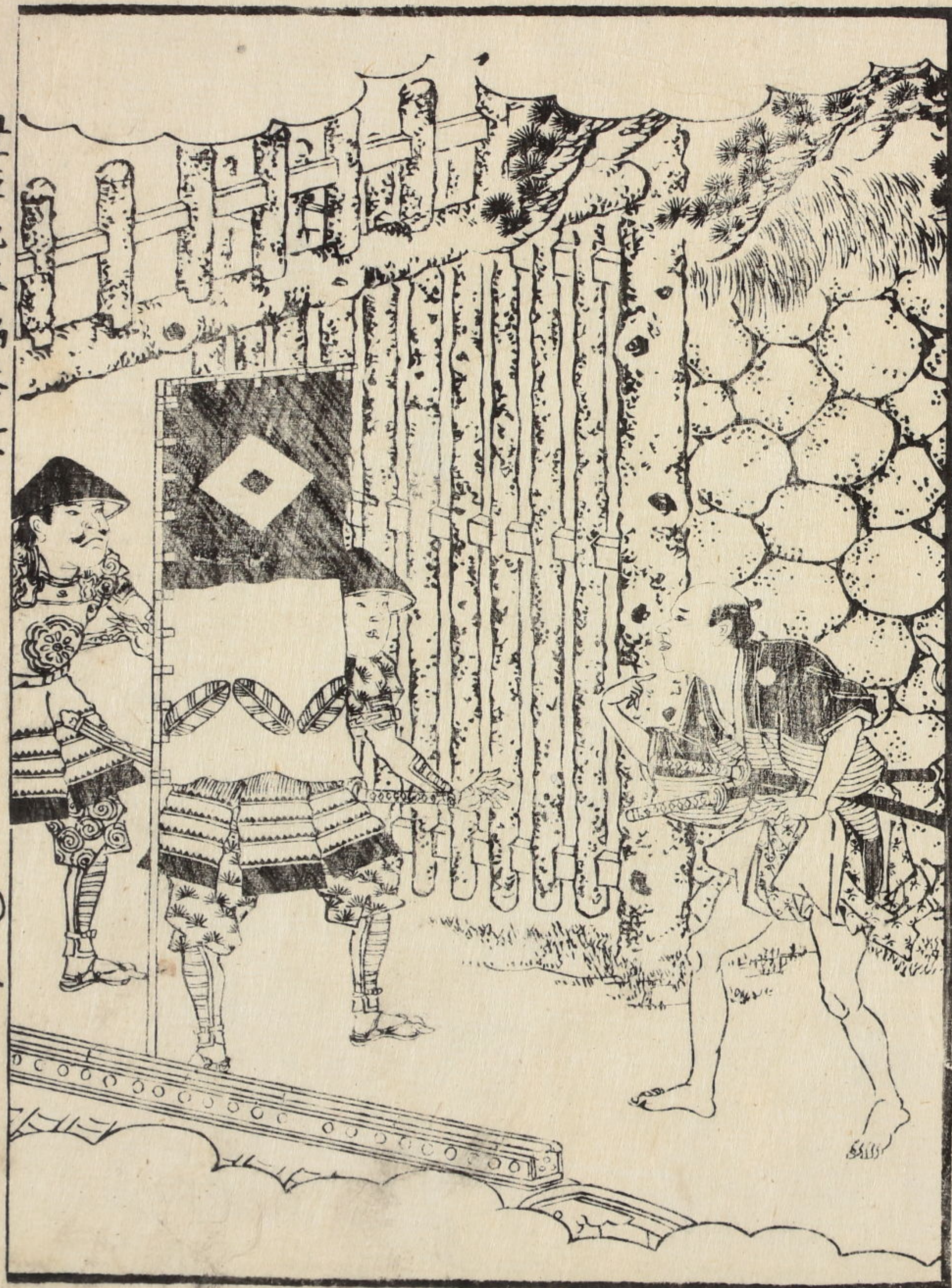
元長邪正を
試て三澤
為虎小
誓書を
記さむ

おらほくは。始終の合戦おつろくを看よる是より元春父子隆
 累各腰刀一個を佩したるのまじく。大將輝元の本陣ある。相山は泰よか
 一高嶺せりまなるや。近來三澤其餘の敵軍敵小勃ると所由る
 一有るの一戦か。がさうらん。東西の益に達する業。同陣同隊は
 あり。敵自方の妨を此山陣の柵を堅固し。自勢をうり。成揮合て隊
 伍を丈夫不敵を引清。決戦するをよる。からん三澤をよめ其餘の
 兵軍。敵に成通むる河の。真実を秀吉か。自ら自方の陣一斬
 投べし。其時こそ三方より。秀吉の旗本一奮地。斬投快死するの外
 計議。と評議。斬す。各本陣。一決を。各本陣。一決を。各本陣。一決を。
 元長ハ傑氣の大將なり。これを。從者も率。速より直。小三澤。為虎
 が陣所。到り。突も。突と通。里。為虎。膝。根。に。を。圍。と。座。い。く。為虎

敵秀吉に花捲して自方の陣を離く。一伐兼。听。その實。之。を。乳。え。
 た。め。得。く。あ。ま。ま。ぐ。入。来。か。人。汝。實。に。然。こ。何。と。万。僅。响。首。を。擡。斬。く。荒。花
 守。に。魏。る。一。い。か。ふ。と。鞠。同。ま。為。虎。素。より。活。る。政。企。か。さ。解。か。れ。が。果。ま
 で。ふ。ら。ち。後。さ。身。を。地。に。投。て。謝。して。應。ら。く。斯。ハ。懐。ひ。も。懸。ら。ぬ。命。せ
 伐兼。听。そのまじく。小三澤。を。智。子。の。い。ご。も。我。代。先。ある。祖。より。元。利。家。の
 臣。と。して。君。恩。ハ。山。海。も。か。ど。及。ぶ。處。を。其。恩。澤。を。蒙。る。身。に。て。い。を。さ。く。素
 の。運。命。を。押。起。す。ま。う。そ。と。さ。や。是。ハ。讒。者。の。計。言。を。目。の。我。を。失。え。ん。た。め
 ち。る。處。一。斯。所。然。心。に。開。る。入。の。起。證。文。成。書。記。て。呈。す。處。に。い。それ。あ。く。之
 猶。疑。を。せ。り。う。の。我。身。ハ。薄。命。な。る。に。方。僅。所。希。ま。一。壯。壯。剛。亦。心。成。
 是。れ。か。う。何。と。い。ひ。之。重。ま。成。聆。く。若。川。元。長。實。に。殺。か。れ。た。の。あ。く。を。
 誓。書。を。記。得。ゆ。と。く。願。く。野。の。平。且。紙。を。翻。覆。し。て。當。出。せ。を。為。虎。松。く

其素以天地の神祇を驚かし、てそのまゝに誓書を記得、興信を以て
 撃出たり。元長得と其終を記するに、邪色些みも入えざらんれば、疑ふべきにあ
 らば、其素誓書を襟底にほ。陣所ふこを、陣らまてり。備亦輝元が信り
 居る。廂山の陣、其翌朝六月朔日の卯刻より、卒忽に諸卒を並催
 し、廂山の四方八隅、柵を築せ、堤を築せ、此が前面三層、弓矢銃を備へ、
 せ、隊伍堅固に成、銃志々、今、自方、軍中に、激しく、叛心の粟、阿まは、
 て、坊らるる、さるる、あ、と、將、公、成、寧、かしめ、諸、卒、も、雜、雑、を、志、門、め、け、き、を、陣
 中、漸、く、平、和、に、あり、ぬ、然、ば、と、く、已、前、後、け、計、議、の、如、く、羽、柴、秀、長、に、陣、一、斬
 投、秀、長、に、中、上、撲、撃、人、と、其、日、限、に、明、後、日、六、月、四、日、に、急、た、る、を、し、と、出、我、の、後
 を、相、定、め、門、に、陣、依、り、し、り、り、る、を、
 秀、長、侯、安、國、寺、惠、慶、調、和、属、傳、八、被、捕

張、郎、公、と、寇、義、公、と、相、國、寺、に、遊、び、く、ト、肆、小、相、を、執、せ、し、む、を、二、士、共、小、宰相
 たり、と、こ、を、成、白、と、他、年、果、し、て、斬、の、如、し、和、漢、の、例、髪、髻、を、解、する、陣、の、あり、宰
 相、之、関、白、と、相、國、寺、と、安、國、寺、と、似、る、を、と、や、い、わ、し、り、揮、出、せる、その、お、や
 有、人、茲、も、祈、し、さ、り、出、來、れ、り、當、日、六、月、四、日、の、發、天、荒、茶、當、使、者、也、り、
 て、小、早、川、の、陣、ふ、在、り、安、國、寺、惠、慶、と、い、ふ、聖、子、を、招、れ、り、并、も、遠、惠、慶、に
 毛利、輝、元、歸、依、の、信、ふ、く、藝、州、廣、德、此、城、下、を、大、通、場、に、任、職、し、て、官、祿
 と、を、以、貴、り、け、る、然、る、ふ、先、天、法、る、永、祿、の、元、秀、吉、三、の、時、あり、秀、吉、松、下、の、家、を、出
 く、故、郷、に、歸、らん、途、中、や、と、だ、の、橋、に、茶、店、に、お、い、く、惠、慶、秀、吉、此、相
 を、親、し、天、下、に、將、と、奇、相、あり、と、謂、く、何、の、今、果、し、て、織、田、柱、石、に、長、居
 たり、し、ぬ、數、万、の、軍、士、に、傳、令、し、て、遠、小、早、川、の、後、に、進、む、驗、に、遠、人、あ、り、天、日
 下、に、大、業、を、成、以、為、り、と、私、情、に、懷、在、り、を、れ、を、可、望、秀、吉、に、對、面、し、て、書、交



豊臣五将



安國寺惠慶
 舊情を
 攀く
 秀吉の
 陣ふ
 到る

豊臣五将

の情も悟りたりと。毛利三家の長陣を訪訊せんと披露して。云日已前以度
 傳出旅なり。遠地も来りある機あり。秀吉の使者を受たりし。か
 扶そのも取敢ひ。秀吉の舊好のまに。訪ふに。城隆系まで出。然し
 て秀吉が本陣なる。時が鼻へ来りて着き。獲て昔と云。泥月水。数万軍
 此將たるに。自然と禮の恭しきあり。秀吉も對面し。つも。迷ふ古時を。禪受
 頗る舊情を深かりし。時。秀吉東に。近來秀吉軍を。獲して。元
 春隆系と對陣する。陣全く。達意の。其不謂これ。城頑不推
 さ。主君若大臣。位長公。輝元と水魚の盟約を。天下泰平を。しめんと。
 おりたる。程も。前將軍。昭公。暗愚に。おはし。野心を。おぼ
 たせられ。終ふ。後。河下。向有。より。西家。忽地。盟を。破り。將勇を。文。前
 を。飛し。兵。我。等。一。さ。間。と。ある。唯。右。大臣。の。代。官。と。して。輝。元。元。春。隆。系。

倭と万死を畏トび争鋒せり。是は然く。關東。四國。或は九州。北陸。の將士。倭
 其。虚。に。下。り。て。那。威。を。奮。ひ。交。戦。更。小。羅。討。し。これ。が。ため。ふ。天下。に。可。民。塗
 炭。の中。に。困。苦。する。事。年。稍。淹。し。く。拔。避。得。ば。然。ば。主。君。此。意。と。する。と。さ
 ろ。私。の。體。若。法。法。度。て。天下。泰。平。の。功。勞。を。妨。る。不。存。者。く。は。此。に。速。く。和。睦。を
 遂。ら。せ。位。長。に。亦。極。く。不。服。の。鼻。羽。を。証。成。さ。し。輝。元。亦。西。海。を。平。治。せ
 ら。れ。ば。忽。地。日。の。本。平。定。た。し。め。つ。田。氏。泰。平。以。滿。る。盛。一。是。位。長。の。欲。さ。る
 不。乃。臣。に。を。強。強。さ。より。命。令。する。に。ぞ。然。ば。和。睦。の。一。義。も。あ。い。く。秀。吉。私。の
 意。を。も。つ。て。料理。つ。ると。あ。ぬ。に。あ。ら。ば。遠。意。越。せ。り。て。貴。信。も。あ。ら。く。元。春
 隆。系。に。言。達。し。和。議。熟。成。ある。に。あ。い。く。お。伯。耆。本。國。を。境。封。と。し。南。八。當
 國。兄。弟。川。城。を。て。便。分。する。と。さ。し。其。不。謂。い。か。ん。と。是。を。い。ふ。伯。州。に。在。南
 條。小。鴨。近。年。自。方。に。力。以。染。が。本。領。安。め。し。め。ん。ふ。ふ。さ。あり。ま。つ。と。元

那川城境封とあるへ此所に出陣して高松城を攻め清水長九清
 門が首を看びして和睦せん事任長公におぼしめし。いかにあつた所もあ
 る。是れは城の門て宗治に切腹いしをせまうまふ。遠くは快と元春隆
 景彼両将へ披露せし。然るに東に元春隆景に對面し新如のよと訣言
 真を退出で毛利の陣へ入り。元春隆景に對面し新如のよと訣言
 をかく。稟舒らまされ。元春隆景も是を聆案の外なる洞かれば呆る
 まで。此稍要時。言をも謂びて又互思惟。疑へおとせし。元春漸く頭
 城糧は孫子が調る言を聆る。約りて和睦をす。保ありとを初る。今他軍
 自軍に所行を鑑るに。羽柴が兵士の最多く。毛利が軍勢殊に妙。皆てや
 信長近きうち出張するに所か。他軍は多く。勢深ふ。攻るは亦
 猛か。自軍今在るの不利。助勢とまる。援軍もあ。救えんとする。高松

城へ。暇系小落城せん。日減。弄て待よ。ありぬ。後以。餘の十分の
 勝利をたもちて。自軍八十分の敗勢をいごくり。世に之の思慮する。子
 我をこれにも。勝敗損利。歴然として。敵ぬべし。利や智勇。秀吉におい
 てかや。何ぞ。遠理を識ごらん。然るに。今更所。保あす。と。和議をかさん
 と。量料。こと。誠。不審。此。一。あり。努。く。遠。義。の。許。宿。が。と。胸。小。隆。景
 まう。され。る。元。春。此。美。見。遂。一。旨。意。に。符。合。せ。り。然。る。不。俺。門。軍。馬。を
 獲。し。遠。地。まで。出。張。を。せ。し。只。之。は。是。余。高。松。の。難。危。城。救。ひ。清水。宗。治。を。助
 ぐ。へ。と。あり。備。よ。秀。吉。城。防。を。断。り。洪水。城。を。法。流。し。也。宗。治。を。報。と
 せ。し。城。中。の。軍。民。城。志。く。助。安。る。と。その。あり。を。望。に。強。せ。し。和。平。を。遂。じ。
 宗。治。を。も。て。切。腹。を。せん。の。あり。を。決。して。和。禪。張。ふ。す。と。唯。深。く。我。て
 死。後。備。に。する。の。外。あり。と。之。を。説。き。く。と。會。へ。ら。ま。さ。り。惠。瓊。も。これ



藤田傳八
密使
蛙が鼻の
陣外
捕へ



此方あり。高松の陣が真に別。元春隆景が言る隆景は前守に報たり。
 開も入ら羽柴が勝つと軍攻忽然と止むること。然に隆景の所謂あり。
 其を精しく鞠ぬるに方僅を首發めぬ陣にのまど。元春隆景が軍中六令
 法のりとも厳密にして備率の着獲怠慢なく。時々刻々小番兵攻交
 代。夜深といふとも供ことなく。燦炬を多く焚連杯を土堤の陰林の樹
 下に。駿率を轟と列在を既攻構等させ。或は情見既數十人遠隔那隈
 小散在るを或は二丁或は五丁乃至十丁ごその際。伏をせりて潜躲
 款の閑者潜來る既初る胸の折敵の暗号を鳴す。通々通達合ふと不
 意だに容易翻りて。浩る全備の河ををこそ。元春隆景が術攻
 鳩せど。高松口邊の長堤を断落んあを難さば人胸。六月三日夜
 の子も稍盡く。丑子をばく當天ありたるが。破をて。陣の並うら飛り

弊禍の根巻揚つ。長き刀試躲を相あし。陣が真の本陣を左へ嚮ふ。
 潜く潜くと通る者あり。個々此を候速くを着破遠後遠際より走集り。
 暗号に大鼓を搦鳴せ。数百の駿率八方より。轟くと至雖て怪しき漢を
 推捕巻有無を言せ。ば手括足提。高も眩もに捆縛。潜着將大長慶松が陣
 一撃往斯とまり。斬るふを慶松くだ人の漢子を撃出。をく侍とこれ
 と祝るに面不沈。敵陣墜たさば。恩得あるべき斬者あらん。と大將は陣
 一撃たりたる。秀右の色試聆ふ。太刀推拏て起出。下群して。標下試
 探す。むるふ果して一封の翰書。首を頸下に密固と括着たり。駿率門
 子登く。拏拏て。秀右の系に。呈出。流石守る色試執て。首拏去。面封推
 破。里書翰の面記。看く去。右門後。河を教小早川。元清門尉殿。惟任日向
 守と記したる。是則地光秀の密使なる。後田傳八郎。負成あり。昨二日此功

夜のこゝろ系郡妙心寺に發行して行程およそ七十里を一晝夜にして馳来
 り。毛利の陣へ投入とせしに慮も、羽柴が存候に捕らるる。今亦密書をも
 奪られたり。秀長遠書の面記を祝ると等しく、馳騎之。被討者之割奪
 に、軀程もたまたま、破着れを首より胸へ、韓竹の條く割却せられ、味
 ともいへば息絶たり。秀長氣色快然として、駈卒を勞らひ、汝們よく軍
 令を守り。晝夜怠懈多しをそく。歎の間者之捕得て、自軍勝利の瑞と
 ありぬ。猶遠後も懈怠なく。相守られよと、禮賞厚く、駈卒一個に青鉄
 一貫文、貶りたれを、食く、歎び恩を謝す。原の守に返りぬ。秀長秀長
 此に遠く、波書に、祝す。今月二日、系郡本能寺及二條の城に、信
 長父子を撃つ。滅し。畿内を歎む。家おしと。いども心に獲る。秀長は、
 柴の其地の戦中、小毘果され、遁日遠事、以、賂とのありを、羽柴が陣

中、忽然として、足元安所を失ふ。其、虚に系く、伐りん。い、い、秀
 長、勇ありとも、滅亡不日ある。ど、河原の一助ともありんと、歎く。鞍門、床に
 呈書し、畢ぬと。記書する。祝するより、天に哭く。地も悲し。涙も血を
 潮をりふして、止る。小便子ありたり。これ、小因、一度の悲哀、一度を
 憤怒。且亦一度の歎び。遠書れよと、歎の、小。容ざりし、あを、我運の、天よ
 く、あり。天よ、く、こ、色、城、場、ありん。奈くと、巻收め。然して、機、會、よく、安國、と
 此、歎の、陣中、に、ある。伐、知く、和、睦の、事、を、料理、せ、たり。方、僅、秀、長、の、身、に
 執て、大、愛、これ、小、過、愈、う、べ。亦、小、毛利、の、大、歎、ありて、る。松、の、城、の、ま、
 ば、後、よ、の、明、智、の、逆、礼、起、り、く。速、く、も、亦、道、法、失、ひ、進、む、も、敢、て、其、途
 か、か、ん。歎、備、遠、事、以、誠、その、あり、を、滅、し、進、退、の、途、を、失、ひ、一、身、の、危
 急、遠、小、あり、人、尋、常、の、大、將、あり、を、慌、忙、諸、將、を、集、め、さ、ぬ、ぐ、高、城、を

さぶさに獨心に秘蔵す。是にも顯を恭然自若と和平の詞を執辨ひ
それのまづび自方の備軍れ銃氣折失さる實小天下の豪傑こそ
只遠一人ありぬるを

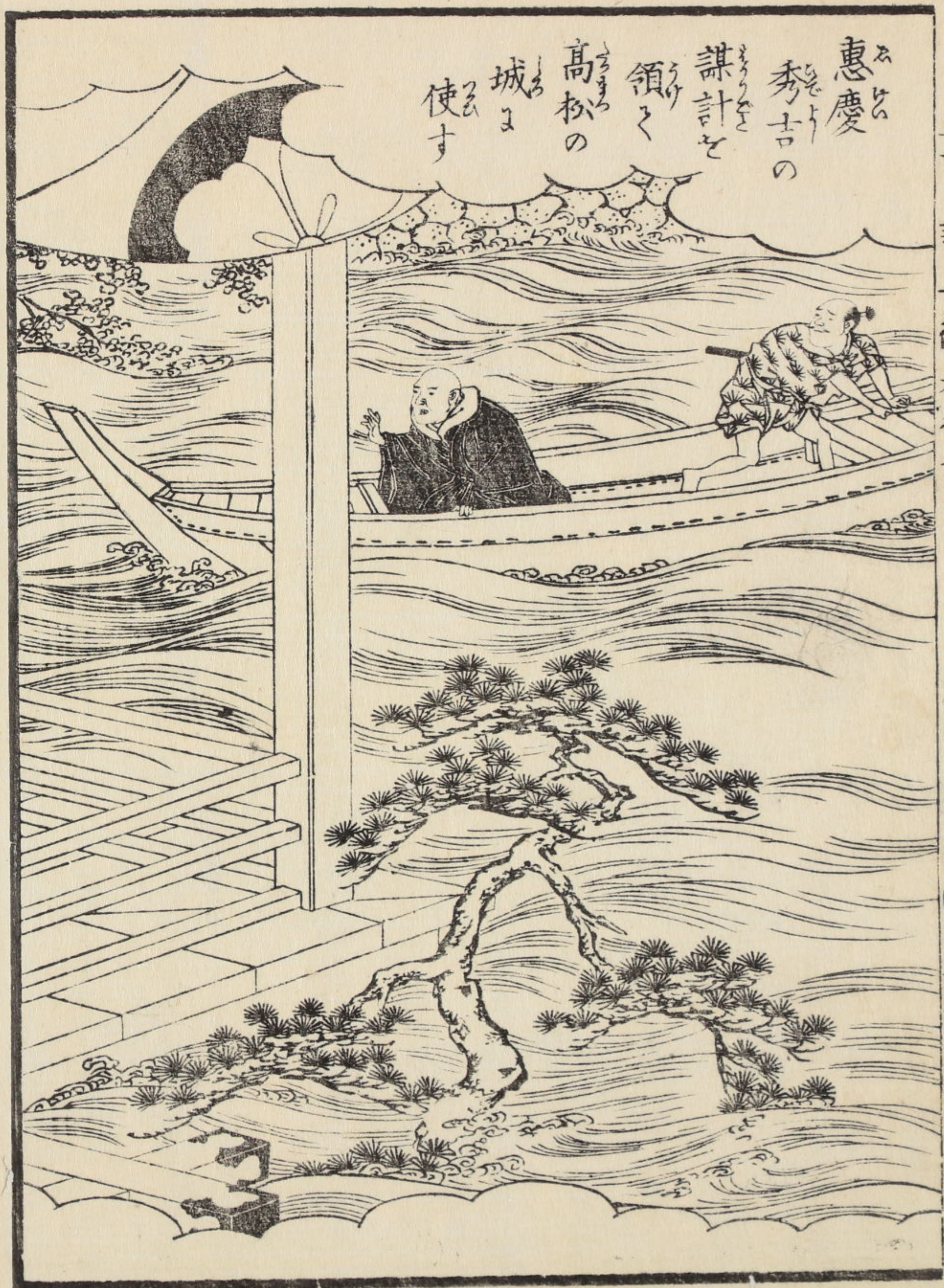
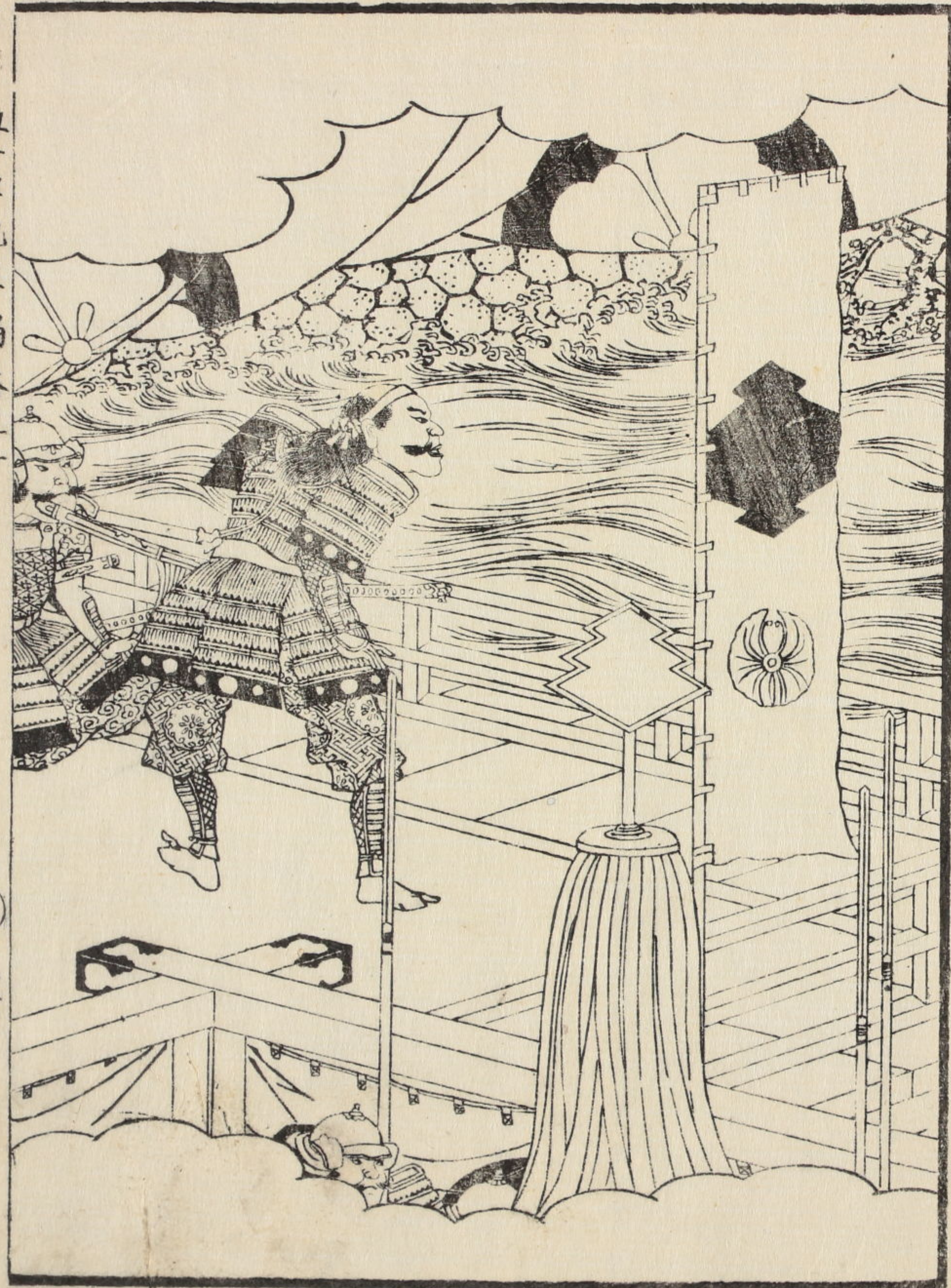
清水長九郎門澤遂自殺 属西軍和睦

愉快なる出波は来幸福あるは是會天の威むるとあり地は
おむところにして豊公よく導さぬ然も後田傳八が怪歩れ若せ用ひて
そのころこれ紙毛利へ報人とする其傳八が奇術れ脚も先秀がため用若
あふび秀若に事を報るの若みして秀若がための用若あり新まらに
の符合さるを天下万里の廣くとを會秀若が前後たるびといふを
みし備も安國寺の惠瓊法師へ若び秀若の陣子到り若川小早川の
答語はりて聆るは若若るにぞ秀若これを聆らひ檢り理の正道を

清水せりの助命せを和睦兼諾快ふし。倘然なくんば和睦せんと
義將の誠心そのあふさハ慙ふるらび若と秀若が刃においハ攻蒐
り。然らばおまども元春隆景烈我敵直の大將をまを听寄ざるはいふ
只奇計ふハ如産からびと惠瓊に多く贈餽す。然して秀若相静小汝
遠道の彌辨直しく繕らふそのあふ。哨將軍家へ行よして五分不領
我得さるる。勞を厭を哨計畧試行ふ産さやと聞きたれば惠瓊原若
秀若の天下に將たる若ありと。後若師の少時より。親藏したる譯
あるゆゑ此も辭さる氣危なく何とく命を背くさ。いかに祈指揮に
いよを身に力得事にしてあふを粉骨さとも厭さるらびと。領兼さる小
若秀若も。まら。快然と笑を會さる。進條く稟されらる。高松

の城至清水長尾門宗治の義忠信中國に雙ぶべきものか我士
 あり。汝小舟に括束く。彼城中へ撈到り。今哨新吉一始終の言と元春
 隆景が言と我精しく候せし祝諭させ。宗治は切腹かさむべし。然る
 胸の両家の和睦忽地こふ洞ふて。中國一時子平均とす。是亦汝が大
 切あり。搦つと群する事のみ事と命せしむるも安國寺。仔細に所聴重
 地は小舟に跳束て。高松の城へ赴さる。此胸城將清水長尾門を難
 波道松一舟に。寨楼に登望して。一軍旅を群し在る。遂に惠瓊が来
 る候着て。各これと大に訝里。今安國寺が遠所に在る。定めて不測去そ
 あり候。快唱奉て所下とす。城門城関を投ぐる。城中とくも水
 流けを。船の傍まき。奉丸まき。撐着ぐる胸。清水宗治安國寺ををく
 招き。來れる意趣いのかよと同。惠瓊謹で東へくる。遠道秀吉忠信

せり川と和睦談判し。あまふ元春隆景を將ふ。足下の命令を。徳兵衛
 和睦のよめ決して。返唯戦ふ。俱に死せんと。全信正義を宣ふ。之秀吉
 へ又足下せり川と生命命を。在るに恥辱とするべし。と宣ふ。より。和睦
 洞あふ。うとを看え。然ども愚信へ適合戦の和睦た。せめ。中國
 地平均。万民都て若楚也。免き人。釋せ。願ふ。か。免。小。快。成。務。せ。し
 と。只。宿。兩。家。の。往。來。し。て。詞。を。料。理。と。し。ふ。と。い。ふ。も。遠。一。糸。の。維。に。固。て。和
 禪。全。く。破。れ。ん。と。い。ふ。故。に。來。り。と。足。下。の。計。議。を。借。人。と。し。願。く。は。し。ま。す。と。宣。ふ。
 も。何。と。も。哨。下。教。示。せ。り。と。い。ふ。故。に。宗。治。熱。く。是。を。聆。て。感。涙。肝。小。銘。出。る。ま。で。
 潜。然。と。し。て。さ。り。零。霎。時。へ。止。敢。さ。し。が。稍。あ。り。と。相。齒。禁。驗。時。や。元。利
 の。礎。石。元。春。隆。景。の。ご。と。と。後。將。へ。又。世。に。あり。と。是。を。お。お。え。げ。今。兩。陣。の。勝負
 を。量。る。小。款。の。多。勢。なる。の。と。信。長。を。さ。ふ。出。馬。を。と。所。然。と。い。は。れ。ま。す。と。傳



惠慶みけい
 秀吉ひでよしの
 謀計まうけいを
 領うりく
 高松たかまつの
 城しろを
 使つかす

豊臣言五條卷之十

五

大なる一。それ小似もせ。自方ハ微勢。わうは助勢兵士もな。多毛。利家
此存亡唯這一舉にあり。その後。偶款より和せんといふ。宗治。六。其の疲
武者。又人十人棄る。とも。款。既。和。睦。の。詞。也。執行。も。せ。り。な。り。却
く。咱。を。覆。憐。せ。り。和。禪。状。儀。ひ。り。ぬ。御。意。悉。く。毛。物。祈。ひ。し。咱。今
露。命。儀。の。づ。づ。に。暫。旬。存。生。す。り。在。も。決。て。助。る。命。に。何。ん。生。長。過
て。切。り。死。身。の。名。儀。汚。さん。より。潔。く。旺。壯。野。々。遠。遭。の。和。儀。の。ひ。を。を
乃。臣。分。死。期。の。面。目。け。と。り。噫。歎。く。や。宗。治。が。い。ま。ご。衣。運。不。盡。り。七。憾
わ。ぬ。命。唯。ひ。と。り。棄。る。多。由。亦。中。國。の。危。亡。を。救。ひ。國。家。を。安。ん。下。諸。氏。の
苦。患。救。助。る。様。絲。ふ。く。そ。り。大。意。あり。と。筆。檢。把。て。秀。右。一。遠。長。書。輪。の
文。に。曰

謹而奉述。愚意當地。長々之御在陣。辛苦疲勞。乍

恐奉察候。然者。今既我々。所運極此。愈近覺候。小臣
清水長左衛門宗治。代于城中之衆。命可致切腹
之間。怖者被垂憐。愍牢城之數輩。皆悉御助。命被
成賜者。不可奉存候。依回章之次第。而明五日辰
刻。可及切腹候。其節。小舟一艘。並酒肴。聊有恩賜
者。可謝兵士之疲勞候。恐々謹言

天正十年六月四日

清水長左衛門宗治

蜂須賀小六殿
堀尾茂助殿

斯の如く。記書了。安國寺に。こ。送。渡。與。所。房。達。書。を。齋。行。く。院。承。り
小。淵。より。執。綱。解。り。ま。る。く。單。に。怖。ひ。ま。る。く。り。諸。亦。皆。川。小

早川六乃臣生害の俸子かしくい決して河野禪河よりかき候西将一聞
達せをわらへん許容かろふと稟を致候て安國寺精威渡に咄却り
誠以忠信我勇の武士に足下此様をまうさふこと英名普く九五
で輝くかめと嘆稱かし然バ登速遠由を荒前守一言達し和平を成
統をらしむるしらく蛙が鼻一急歸里宗治の書翰を呈出し河の始末
を解るにせ秀吉わらく感嘆かし世に未曾有なる我勇士か先遠利
へ織田毛利和順にて天下泰平かえし河野の勤功強よいし群ふ
秀吉を恩賞博大なるべとまうしふ。惠禮も遠响いゆし信長公の
先秀に裁せられぬひし事我れさるが由急小心せり。遠細辨を假達を
所領傍賜ふと獨我して在たりる荒前守も宗治へ返翰する
其文に

御状之趣荒前守令相達之處以御身一人之生
害被代牢城之庶人之結構一入被相感即可被
應御望之昔候依此小船一艘酒肴十荷可進之
候明日及其刻限者檢使可差遣候間御心靜御
用意可有之候恐々謹言

天正十年六月四日

清水長左衛門殿

蜂須賀小六郎
堀尾 茂 助

遠書を以て安國寺に傳ふかむむき。清水宗治大不執び當役切
版の準備を以時ふ長左衛門宗治が舎兄月清入道にまを合あ借ふ
賤刺らんと最切の程具を代看く頻にまを林宗と曰昨日羽柴

一葉せし乃弟一個自害を。城中の將軍志く助命を乞ふる物也。
 決して生害しあらずと。聆く月清うち若ひ。吾輩も入道はも。
 唯の汝が兄しれ。家名相續はとくし。多病に極く其任は當らる。
 由入道をし。家督は汝に譲りた望。然もよ何く汝が身に今遠難哉。
 身も唯の家督を傳たるも。遠難をもて。唯身も當難。今日生害を
 言ふもの。唯を外の何れも。若び禁むる何なれ。つる制も
 听客は。遠胸難波。近松も。僅も切腹と。つるを。宗治これを推止め
 て。是下達も。辱めも。何といふ。頼もく。遠地は。通れ。帰國を
 と。他の朝も。あつ。度希は。生命を。命を。自生害の。所行を。元春
 隆景。両公。よ。に。傳。た。び。む。と。听。も。敢。伝。兵。清。左。衛。門。形。の。意。
 入ぬ。大將の。命。に。を。俺。們。不。屑。い。え。ど。も。亞。主。隆。景。に。命。被。置。る。松

の城へ。頼。吉。の。目。より。是。下。と。生死。を。借。り。せ。ん。と。謂。も。定。する。道。も
 ぞ。あり。たる。是。俺。們。が。職。を。な。れ。を。決。して。活。命。を。さ。す。の。理。に。と。必。死。の
 氣。を。激。然。たり。時。既。死。期。の。を。さ。な。れ。を。流。石。也。陣。中。より。清。水。が。最
 期。の。檢。使。と。して。堀。尾。後。助。右。衛。門。三。右。の。從。者。と。小。艇。に。うち。乘。靜。に。遠。方
 へ。歸。進。ま。を。清。水。兄。也。難。波。近。松。秀。右。より。流。石。也。小。舟。を。渡。渡
 へ。堀。尾。田。切。與。十。郎。宗。治。の。一。人。は。初。前。命。に。肝。到。舟。より。ち。乘。く。堀
 門。を。開。き。歸。出。たり。これ。や。弘。誓。の。彼。岸。也。慈悲。の。橋。と。生死。の。海。渡。
 出る。も。期。や。と。哀。態。あり。猛。心。の。軍。士。も。悲。歎。も。堪。え。ば。胸。塞。む。る。に。皆
 て。や。あ。ま。が。妻。子。眷。屬。は。皆。引。起。つ。涙。は。追。慕。し。遠。世。の。新。別。方。僅。些。刻
 と。鏡。花。も。引。橋。し。悲。と。叫。ぶ。所。見。へ。こ。と。より。過。く。哀。れ。も。外。他。の。袂。は
 濡。し。たる。秀。右。の。陣。中。より。も。宗。治。已。下。の。生。害。を。見。敵。置。せ。ん。と。群。を。出。す。



豊臣記五



清水宗治兄弟
 義を悼む
 船中
 潔死す

豊臣記五

色の岸に幸踏たり。雙方舟の解すに際近くありたれ。宗治声
 け禮を整行。これハ毛利家にかゝる久々厚恩に添せしむる清水
 長左衛門全くと入道月清まうと染ハ隆承の旗下はく。右流の領到
 たる難波傳兵衛。近松たあ尉の口人充み代里と切腹をかれ。俺們生
 害しおろろなバ。流希も殿と右馬頭。輝と睦の義をよた。個程あくる
 中。単に頼ひまわさると。懸懸に演られ。堀尾もま。舟傍進せ。
 是ハ流希も近臣。堀尾後助吉晴ふくひをよとふすれ。所望の條お
 らも。作所らま。流希守にも各が。心中で深く感佩せられ。約儀の
 首一巻も決して想遠あふ。心寂然に生害を。遂させま。とあり
 たるを。四個ハ悠々然とて笑ひを傳ふ。そのあふ。長左衛門起奉り。最
 期の一曲奏べんとす。腰刀拔擗て頭上に翳く。最津らあ。聲より

幾「の舟をこま。達瀬の浪枕浮せ。長左衛門見習もくの發るぬ。あどを
 みるれ。と淫ふ声と一舟に。肛肛刺と。十文字の激く。撃と聆より。與
 十郎太刀振揚ると。着る際。速く毛。首ハ按當と落し。ハ赤牡丹花
 此葉の枝。枝離る。像くあり。月清ハこれを着るより。も弓手に。短冊
 馬手に。業。さうくと書一首の。拜世聲。高ら。か小吟。さうとく
 惜も。時。りて。こ。せ。世。中。の。花。を。花。を。れ。人。も。人。を。ま
 這一吟の。か。を。あ。ぬ。に。肛。十。文字。に。肛。刺。る。が。人。も。人。を。ぬ。れ。句。の。は
 版。刺。刀。拔。收。め。く。后。人。も。人。を。ぬ。れ。と。言。ら。か。小。吟。ト。早。れ。バ。與。十。郎。因。ト。く
 首。試。う。ら。お。と。は。是。は。後。ひ。て。難。波。近。松。借。り。肛。刺。死。し。ら。た。れ。バ。あ。ま。も
 次。身。に。劫。削。して。各。口。の。姓。名。或。首。に。記。し。し。檢。使。は。近。づ。き。堀。尾。首。首
 探。り。て。后。與。十。郎。も。肛。肛。刺。咽。を。斬。り。死。し。ら。た。れ。バ。救。方。の。軍。士。これ

茂親行。大張勇士よ我將よと感嘆する声も無く、周くくし止
ざりけり。然れども毛利家より清水俊成將が切後の詞を惠瓊傳
者と听より毛鷲くつと一急あり。諸の宗治毛利家のことを思て
生害せしよる。忠切雖も遠士に。起まの亦あるまると。感涙子行深の
如く。壓難てぞおろく。時子元春宣ひたる中。躬長左衛門自殺の
うへの如何もるとも事返らぬ。渠が遺言を棄つたれを和賤を熟禪
とてこれおとど此おおいと亦存び。惠瓊を秀吉が陣へ遣り。革一の
使節これ福系城守を當副とす。遠駒羽柴秀吉の堀尾が若宗
治の自殺を精しく听しぬ。殆感ふ堪ざりて。今更惜ま我士ありとを
然りとていとも毛利家より。和賤の詞のなごて又言来らざる譯よ。詞も
いごと終らぬふ毛利の使節福系。惠瓊。淡野をよのく言状たり。

然バ対面をなす。席正柱最嚴重に。使者茂目前へ導き出。對
面の廳れ方若に。黒田。勝。眞。實。看堂。堀尾。青木。本下。仙石。神子。田。脇。坂
槽谷。列座せり。遠侍より加藤。福清。片桐。平野。石川。石田。深。然。う。と。連
派たり。大將出座と呼声一斉。滿門の紙戸開る。儀祝を。白。後。抄。紙。被。下。儀
孫流の長袴を。わ。を。膝。へ。探。揚。て。し。ん。む。と。座。せ。を。荒。群。の。諸。士。會。一。同。に
低頭。と。相。強。太。慟。と。と。と。惠。瓊。福。系。自。己。を。知。ら。ぬ。疎。む。を。り。に。俯。儀。たり。
荒。茶。守。大。音。に。く。毛。利。家。の。使。者。近。と。と。宮。ふ。これ。も。固。く。誠。儀。を。言。ふ。寸。を
う。膝。ひ。し。筵。席。三。寸。頭。を。擡。け。和。賤。の。詞。致。言。状。に。秀。吉。これ。を。聆。し
ぬ。され。いか。も。輝。元。隆。系。元。春。も。め。の。和。儀。を。謀。せ。て。今。革。て。言。授。る。条。
秀。吉。早。速。主。君。一。所。和。賤。を。乞。く。存。じ。る。と。と。後。ふ。意。量。ら。ぬ。由。一。昨。二。日。系
部。は。條。本。能。寺。に。か。い。く。若。大。臣。信。長。公。の。家。臣。明。智。光。秀。が。た。め。ふ。弑。せ

らさぬいぬと命をば聲もうちらるるまで落涙殺す及をせぬこれか聆より
 遠席へ同極なしたる諸士群臣是をさうり采謀津を吞ふと云能も
 里より秀右涙をか拭ひ曇るの聲泣咳整へ斯の如き遣化かまは遠一
 阪を聆れいくの毛利家定めぬ和睡此事の思く約を愛びさるそれと
 之達と和せんとかるを先達と東出たるごとく伯耆使中出雲の三國を
 色成中より裂通與人質誓書を出さふおいくの秀右和儀を兼送さ
 べし猶然をかくと壱相務負成決さべし是までの信長おそせしより聞
 達此う人の軍なれば及をさると云能を何りしかと今日より心の信ふ吾方
 寸に決謀したる快く帰りと遠詞を主人に若し使者治後と其未深館
 小投多ひぬ福東渾身小滞汗して衣成十分に浸したる謝辞を報て
 帰里ぬ時小濱野黒田の個々津をよ出て後言さるる俺們もめ
 へ

奉听京都の大愛新量此大車成沖心中に藏蓋せし是備俸小和
 睡の洞をんとさると云却て其使者一詞顯小言听らるかがし也
 くだらるるや毛利の三將遠我を聆バ虚機小糸とて攻来し人所賢
 慮あらんを稱ふすと云言状さるを荒岳守茂雷の係く大勢のひ方
 僅上方の裏に録く容易毛利を手に握らる汝侮氣悩るとなれと
 畏る色かくおそせし一身都て是臆あらん欵
 秀吉大慮真令毛利家服属単征帰軍
 雲へ一瞬のうち百変し波へ一蹙のあひぶふ万翻まとも是を疾し
 とまを危うげ豊公一遭慮柄を穿バ百の危急も翻て子種の安穩と也
 万の憂若も愛して億の歡樂とさる此小逢ふと云ハ林も孩も鬼も畏
 る怒バ大勇情智ふる隆系元春の名將家も全く矛盾の懐を棄て

後ごに和わ睦ぼくを調たうる。倭わ不ふ思し識しの奉ほう止しなり。若わ不ふ福ふく系けい誠じやう後ご安あん國こく
寺てら惠ゑい瓊じやうの西せい人にん八はち廂しやう山さんなる毛利家まうりけの本陣ほんじんに立陣たちじんり。筑前守ちくぜんのかみか言まじ後ご
る。調たう倭わを殘のこらば相あひ舒のびる小こぞ。輝元てるもと隆系たかけい元春げんしゅん愼じん或あるハ驕あごた或あるハ軟なやび大たい息いき
る。大たい將しやう輝元てるもと兩りゆう叔しやく叔しやく顧かんく室むろをく音おと後ご
ある哉いか誠まこと回かへ任まか長なが居ゐ家けれ。小こ害がい張ちやう被ひり。都みやこの發はつ動どう絶せつ倫りんなりん。け。虚この
也なり奪うばふて事こと成なり謀まうる。い。か。なる智ち勇ゆうれ秀ひで吉よしも。銳えい氣き折おけく故こ亡なせん。後ご
士しの棄する謀まう略りやくにや。叔しやく叔しやくの思おもい。か。小こぞやと靜しやう子なん探たん問もん。か。ひ。なる。數かず
然しかと。して。座ざ。たる隆系たかけい。後ご客きやくと。して。應こたて。曰いく。大將たいしやうの方かた僅ま室むろふ。ところ
現いま。隙ひま。隙ひま。なく。所ところ。へ。然しか。へ。あ。き。と。と。羽は。秀ひで。吉よし。後ご。末すえ。誠まこと。回かへ。任まか。に。仕つか。て。より。
其その。初はつ。靜せい。を。見けん。聞もん。するに。所ところ。為な。都みやこ。て。不ふ。思し。識し。小こ。して。絶せつ。倫りん。の。將しやう。士し。と。言まう。ふ。
。近ちか。く。ハ。乙おつ。本ほん。攻こう。を。取と。攻こう。眼がん。前ぜん。不ふ。見けん。る。高たか。松まつ。攻こう。ハ。川かわ。も。妙めう。略りやく。奇き。謀まう。小こ。して。

人間にんかん技ぎも思おもへ。比ひ。増ま。く。や。佐さ。長なが。明めい。智ち。が。う。わ。に。弑し。せ。ら。れ。城じやう。初はつ。ハ。慈じ。を。
て。自みづか。己みづか。の。軍ぐん。中ちゆう。を。よ。く。鎮ちん。め。清せい。水すい。を。生せい。害がい。せ。さ。し。て。定さだ。て。集あ。む。る。あ。ら。う。ん。狀じやう
然しか。して。革くわ。ふ。け。方かた。より。和わ。睦ぼく。の。使し。者しや。を。執しやく。ま。不ふ。遠えん。人にん。で。大たい。事じ。成なり。明めい。一いつ。和わ。睦ぼく。代だい。事じ
を。被ひ。く。ん。と。して。威い。を。示し。す。の。衆しゆう。我われ。る。成なり。勇ゆう。なる。か。感かん。下かた。ても。存ぞん。餘あま。り。あり。
斯しか。言こと。さ。秀ひで。吉よし。を。畏おそ。る。中ちゆう。に。聞もん。ゆ。き。と。も。天てん。下か。の。大たい。忌き。恐おそ。く。ハ。遠えん。士し。の。外がわ。か。
る。と。然しか。ま。ま。ま。ば。遠えん。遭そう。秀ひで。吉よし。に。怒いかでか。代だい。終しゆう。ぶ。ハ。長なが。久きう。の。孫そん。も。い。は。し。は。度た。僅ま。小こ。勝か。
利り。を。得え。る。と。も。集あ。む。る。將しやう。軍ぐん。の。柄へい。を。握にぎ。る。を。生せい。害がい。當たう。家け。を。仇あだ。と。怒いかでか。て。吹ふ。毛もう。の。
痰たん。を。負お。人にん。と。是これ。より。大たい。ある。ハ。好この。集あ。む。ハ。勢せい。て。款くわん。む。ぐ。假かり。も。誅しつ。人にん。ト。ま。う。
ま。ほ。只ただ。唯ただ。讐しやう。を。信しん。む。る。を。肝かん。要やう。小こ。い。な。ま。是これ。は。毛利家まうりけ。の。礎いそ。と。て。方かた
代だい。不ふ。朽く。た。じ。む。る。謀まう。略りやく。小こ。い。あり。と。言まう。ふ。ハ。我われ。熱あつ。く。所ところ。也なり。若わ。川かわ。元げん。春しゅん。熱あつ
頭づか。む。ハ。現いま。不ふ。現いま。ハ。隆系たかけい。此こ。言こと。ハ。と。ま。る。是これ。は。毛利家まうりけ。の。礎いそ。と。言まう。ふ。今いま。ハ。何なに。なる。

豊臣言五終卷之十

十四



建前守京都

十五



建前守京都

七

筑前守京都
 本能寺の大變を
 聴て中國より
 一騎不駐

款保まゝに秀吉が望む随意をそと和賚成遂多かしくと我を以て謀め
 道をそと始終を深くも料理果せ先使福永安國寺に内儀裁断を以て後
 當副使者の口状を言啣ぬ且吊靈の奉儀小八沈香一箇金百兩白
 綾百卷蠟燭千挺これを齎せし桂鼻北本陣へ到らしめ三箇條に渡せ
 寢て和賚調熟の洞成言收控書成出して乞ふれば秀吉を速深受
 せし帰軍の輝を听せし使者成を候返さむ備そのち小毛利家
 より又千の加勢の將として渡邊左衛門元忠を唱出しよく秀吉に助
 力して立功せよと命探され和賚の證人實次久苗米藤原秀色
 毛利元就の八男と出させ桂民部廣重後城中副護加勢兵士五
 千餘人弓三百張を銃五百箇銃藥矢鏃までおのく皆具し外に羽
 柴の憑言ありとそ毛利家の花号印たる抱慈姑の旗二十行秀吉に

方へ編られたり。おまふ依て羽柴秀吉毛利三家の大將達を
 とりあはさる候我を感喜し。実小將も一人ありとて人質
 にあらし秀色成懇切に勞和賚成まで調辯うへ嘗てけ地も不用
 かり。序時を速く上洛して逆臣の首級頭並亡君の吊合我を愉
 快せんと欲し毛利三家の大將を對面し存せられと秀吉に中
 剛にたれを逆徒選治を遂てのち。後に出會成期一言えん。然に言
 せ所らきよとく。三使を帰さしめて后森勘八回兵在成和賚言悦
 此使者に命と。毛利の陣所へ遣えられ高松の城中へ浮田成將士一
 万餘精成執らせ河も六月六日の上刻。陣を鼻成陣除き成や門
 續て後敵より馳登るべし。搦へて遅泰を危めしと宣ひ奇く空地
 起馬牽騎てうち隣里隻敵雙拍當多も馬の若く不既望驪

豊田言五編卷之十終
四蹄以逃之強出以相風の天ふも騰らん猛威ははる
加藤福清片桐糟長後野峰須賀振尾中村系田大石神子田中條
本下平野成もめとてこれ方とと地出と宗と陣中烈火は爆る
像く。残すかりる騒動ありけし

繪本豊臣勲功記五編卷之十終

安政七庚申歲孟冬刻成

吉澤氏藏板

安政七年庚申十月出版

編輯者東京 櫻澤堂山

畫工 同 一勇齋國芳

出版人 大阪書林 岡田茂兵衛

同 同 松村九兵衛

發賣人 東京書林 山中市兵衛

芝區三島町

東京書林

大阪書林

東區博勞町四丁目

南區心齋橋筋壹丁目

